エクアドル通信

(4)

番場猛夫

7.2 東部アンデス山脈紀行

正月早々東部アンデス山脈の地質調査旅行に出かける手筈になっていたので　正月休みはひとりでホテルにとじこもって旅行の準備に余念がなかった．　地図の整備文献よみ　写真機　調査用具の手入れにと結構忙しい日を過した．　1月4日がこちらの調査所のご用始めでその日から旅行に必要なベッド　毛布　食糧等の調達がはじまった．　出発準備は日本の地質調査所の場合よりもはるかに手がこんでいると思われた．　それはこちらの所員が調査旅行にそれほど訓練されていないこととさらに重要なことは　ゆく先に宿舎の当てがないという不安があるからでもある．

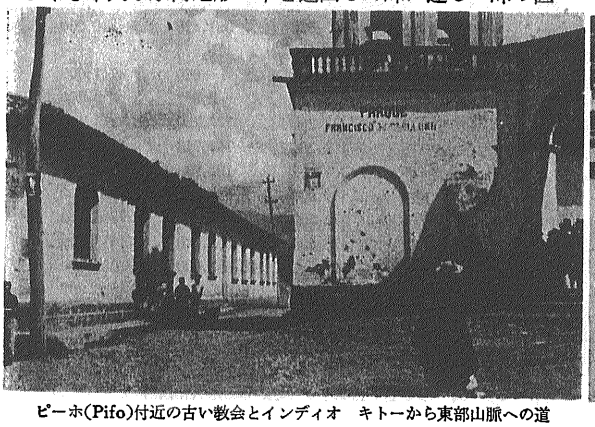
とりあえず　3人分の携帯用ベッド　かや　毛布　ヘルメット　水筒などが新たに購入されて　私たちに支給された．　同行は所員のエレラ（地質学者）と運転手のPonseとである．

1月10日　待望の出発の朝がやってきた．　約束通りPonseが役所のジープで迎えにきたのは夜も明けやらぬ早朝5時30分である．　空には降るように星がまたたいている．　海抜3,000mのキトーの夜明けは零度以下に冷え込んでいるかと思われた．　時ならぬ車のヘッドライトの中におびえた野犬が吠え立てて静寂が破られていく．　前夜用意しておいた冷たいサンドウィッチをかじりながらエレラの家に回り　一路東部アンデスに向った．

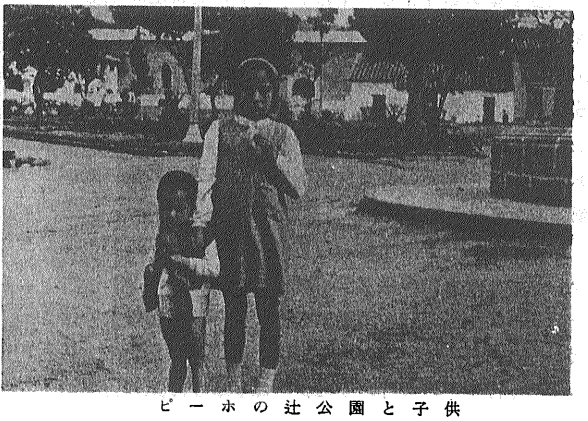
キトーの東方35kmのピーホ（Pifo）の付近で夜が白々とあけはじめた．　ゆく手をさえぎるような東部アンデスのピークが未明の空にくっきりと浮び出ている．　美しくも雄大な氷河地形の中を迂回して峠に達し　峠の直下の部落Papallactaについたのは8時を少し回った頃であった．　ここは中間盆地とはちがってアマゾンからの強風をまともに受けているので　風は冷たく木立には長年の風雪に耐えてきたかのように撓曲し　何とも強烈な印象である．　自動車道路はここで終りになるので　直ちに馬と人夫をかり集める交渉をはじめたが　幸い馬4頭と親方1名とを雇いあげることができて　10時すぎにはPapallactaの部落をあとにして山中の小径を進むことになった．　帰りは同じコースをもどることになるので調査は帰途行なうこととし　ゆけるところまでゆくことにして　ゆく先知れぬ旅は開始された．　そぼ降る雨の中に乗りすてられた　われわれのジープに手を振って別れを告げた．

アマゾン河の支流の1つであるナポ河に沿う山中の小道は道幅わずかに1m　インディオがつくったといわれるこの道は人間のためとは思えぬほどの急勾配で　人頭大あるいはそれより大きい玉石をしきつめ　この上ない悪路である．　荷と人を乗せた馬の足はまことに心もとない．

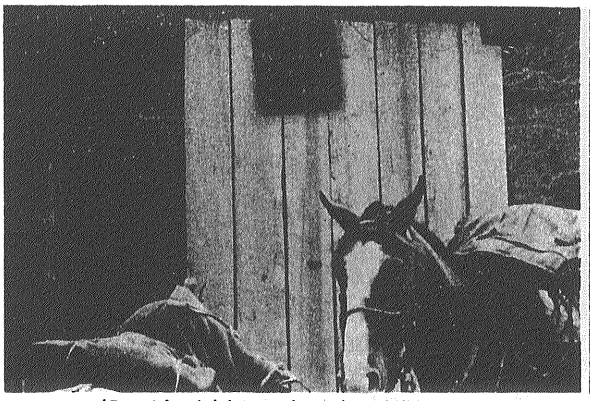
午後1時になって小さい部落につくことができた．ここはクユハ（Cuyuja）といって人口200人足らずの部落で　ナランヒージャと称するミカンに似た果実を栽培する人々が住みついていた．　小学校と小さな店があった平和なたたずまいをみせていた．　われわれはこの店に入って老婆に昼食の用意をしてもらったところ　米飯をたいてくれて　卵の目玉焼きをその上にのせてくれた．朝からの空腹に耐えかねていたのでこの上ない食事であった．　今夜はどうしてもバエッサ（Bae-za）までゆかないと宿舎にありつけないというエレラのことばで　休む間もなく再び馬にまたがり　冷雨の中の行進がはじまった．　バエッサは車をすてたPapallactaの東方45kmということであるが　私の感覚では60kmはまちがいないと思われた．　雨は降る　日は暮れる　そのうえ馬の背に10時間も乗っていると腰から下がしびれてきて何と



ピーホ(Pifo)付近の古い教会とインディオ　キトーから東部山脈への道



ピーホの辻公園と子供



クユハ(Cuyuja)で中食をとったあばら家　標札には　コーヒーと中食いつにても可　とかかれてある　東部山脈の道

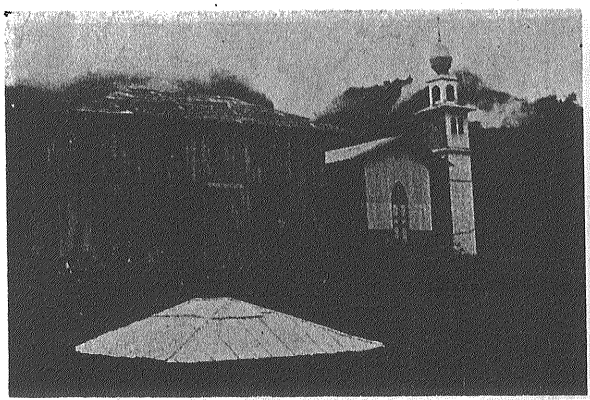
リャーマとよばれるエクアドル産の動物　スペインがせめこんでからは馬を使うようになったが　それ以前は荷役に用いられたという
東部山脈の道

もがまんのならぬ状態になってくる．　このような旅行をはじめて体験した運転手の Pons　は遂に馬からおりて　泣きべそかいて歩いている．　目的地のバエッサについたのは夜の8時半であった．　夜目にかすかに洩れてくる石油ランプの光を求めて一宿一飯の願いを訴えた時の悲愴感は今も忘れることができない．　私どものような旅行者が時々あるとみえて老夫婦がこともなげにスープや肉を出してくれた．　食事をしているうちに馬方はわれわれのベッドを組立て　愛馬に食糧を与え　まめまめしく働いてくれた．　たくましい好漢であった．

屋根があるだけの小屋で寒い一夜を明かし　翌日は再び　荷を積んでNapo河を下った．　しばらくゆくとさしもの峡谷もすっかりひらけ　景観が一変してしまって露岩もあまり見られなくなった．　時々河底に顔を出す露岩はどうやら粘板岩層で　すでにわれわれは変成帯を過ぎたものと思われた．　10km 先のボルハ (Borja) という部落で中食をとりながらエレラと相談をして　この地点から調査をしながらもどることに方針をきめた．雨はますます強さを増して軒から落ちる水滴が次第に勢いを増すようであった．

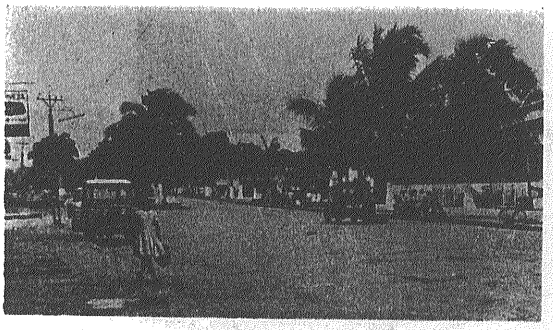
極度の疲労のせいでもあろうか　にわかに身体の充実感がなくなり　腹痛がはじまった．　ひどい下痢である．エレラが心配してドイツ製の消化剤を準備してくれたが一向にききめなく　胃の腑が空になるかと思われるほど何回も便所に立たなくてはならなかった．　エレラは万一のことを心配して　今日中にどうしてもバエッサまでひき返えそうと提案した．　その理由はバエッサには小さい空港があるので　セスナ機でキトーに帰ることができるからであった．　ボルハにぐずぐずしていると　どうなるかわからなぬということで　体力のある中に10 km をもどることになった．

かなり強い雨をついて　今来たばかりる道を4人でもどったときは正に敗軍の将にも似た思いであった．　それにしても再びくることのできないコースに対してただ歩くわけにもゆかず　踏査図つくりと標本の採取を強行した．　エレラが一生懸命にすべての露岩から標本をとって馬につんでくれた．　こうして暮色せまる午後7時すぎに昨夜泊った　バエッサの部落に何とかもどることができた．　幸い腹痛もおさまり　快方に向っているかのように思われてので　セスナ機を用意するための使者の派遣を見合わせて　翌日からの調査旅行をスケジュールどおり行なうことにして　その夜は快い眠りにつくことができた．



バエッサ(Baeza)の部落　雨の中にけぶる教会と学校　ここには平らな土地がほとんどない

ボルハ(Borja)の部落　雨にけぶる小学校　沢はすっかりひらけて台地が広い



バイーア(Bahia)の町なみ　海岸の町でたいへん暑い

バイーア付近の野山は夏枯れで　木の緑がない　しかし雨期になればすぐに芽を出して　ジャングルになる

翌日も　その翌日も冷雨の中を進んだ．　その間われわれの目を楽しませてくれたものは雄大な氷河地形とアマゾン最上流のナポ河の渓谷であったが　一方われわれを悩ましつづけたのは冷雨と悪路であった．　この地区はブラジル方面からの湿気を含んだ風が東部アンデスにさえぎられて　晴れる日がないということであった．13ヵ月雨が降るとさえ表現されているのである．　その雨のために道はものすごく悪く　急坂にさしかかった時はさすがに人も馬もゆく手をみて嘆息を洩らし人馬別々に進まざるをえなかった．　とくにどぎもをぬかれたのはナポ河支流にかかる橋が丸太２本というお粗末さでその下を激流が岩をかんで流れており　流れの中には数刻前に墜落したらしい馬の屍が岩にかかっている図であった．　冷雨にたたかれながら馬小屋のようなところに寝た苦しい旅を続けたかいがあって　１月13日にはPapallacta-Borja　間60kmのルートマップをつくり　変成度のことなった片麻岩類を多量に持ってキトーに帰ることができた．

7．3　西部アンデス山脈紀行

東部アンデスの旅を終ってから息を入れる間もなく西部アンデスへの挑戦の計画がはじまった．　私の帰国まですでに余日がなく　私も所長もこの計画を１日も早く実行することを余儀なくされていた．　２週間の休養をとって西部アンデスの調査に出かけることになったが今度は欲がでて　太平洋海岸から調査をはじめるという大がかりなものになってしまった．　それはエクアドル政府のプロジェクトとして太平洋岸からサントドミンゴまでの国道を建設するための基盤調査が計画されていたので　この機会にそのプロジェクトの予察をかねることになったのである．

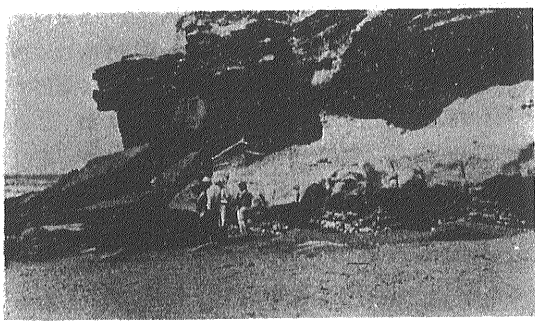
１月27日早朝　エレラと共に飛行機で海岸の町バイーアにとんだが　途中のManta空港上空で機の片足が出なくなり　乗客一同とこれで終りかと青くなったものだが　幸い30分後に足が出て無事着陸した．　この飛行機が使いものにならなくなり　キトーから代用の軍用機がとんできてわれわれを終点のバイーアに運んでくれた．

赤道直下の海岸平野の酷暑と闘いながら連日古第三系とそれをおおっている旧洪積統の地層を追ってジープによる調査を進めた．　バイーアの町のホテルの連中ともすっかりなじみとなって夜は連れだって古物商を訪ねてはインカ時代の土器を見て回った．　この地方はエクアドルにおいては旧土器がよく集められている点で有名なところの１つになっている．　私も２，３気に入ったものをわけてもらい日本へのみやげとすることができた．

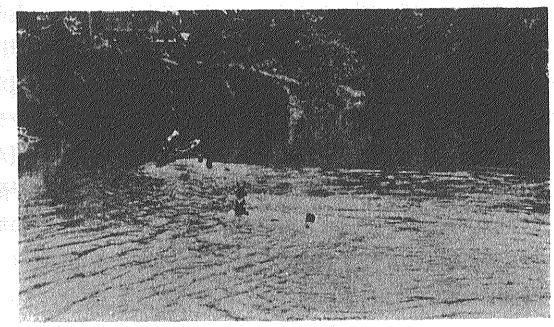
さて約10日間でバイーアからCanitasまでの約100kmの間の地質調査を終ることができた．　この間は自動車

バイーアの町で油をとる豆の荷作りをする労務者

バイーアの古物商に陳列されているインカ時代の数々の土器



バイーアの海岸に露出する古第三系とそれを不整合におおう旧洪積統

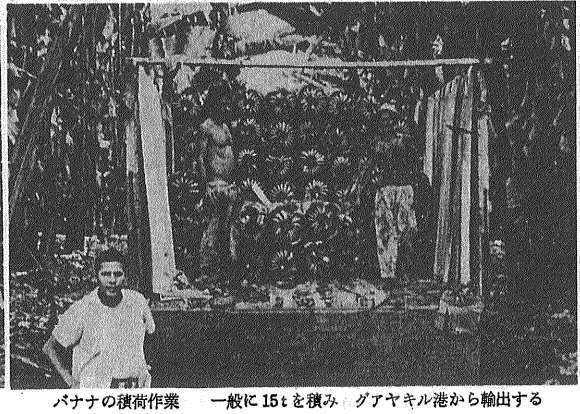


ダウレ河（Rio Daule）を渡渉する調査隊

道路があるので　ジープを駆使して能率のよい作業をすることができたが　いよいよ Canitas から東方の旅は馬を仕立てて道なき難コースにいどまなければならない．Canitas の部落はわずかに２　３軒の農家があるだけで養豚で生活している人々が住んでいた．　ここで私共は人夫２名と馬４頭　食糧などを調達して　Chone 河を東に向けて出発した．　この旅行は先にのべたように　はじめからついていなかったが　このときも大雨のあとで川水は増水し　川を渡るたびに馬は腹を水につけて首を高くあげてよろけながら進んでゆかねばならなかった．馬上にあるわれわれは馬の足にすべてを託して祈る気持であった．　川から丘にのぼる馬道もひどいもので　遂に私の馬が足をすべらしてころんでしまった．　私はとっさにとびおりて馬の下敷にならずにすんだが　右肩から落ちて捻坐のような状態になってしまった．　だがすでに部落からは遠くはなれ　進む以外に方法はなく　一時人夫に肩をもませて休養したあと痛々しい旅をつづけることになった．

アンデスの西側に広がる幅 150km の海岸平野は海抜100〜200m のなだらかな丘の連続であり　高温多湿の熱帯であり　ヤシの葉が下にたれたまま動かぬ無風状態である．　そのむし暑さはいいようがない．　丘は小さい沢にきざまれているが　沢ぞいには必ず旧洪積統とおぼしき砂と粘土の水平の地層があらわれている．　この単調な地形と地質を追いながら４日目にダウレ河（Rio Daule）という大河にさしかかった．　川幅は100mもあろうかと思われ　雨期の濁流が勢いよく南下している．どうしてわれわれの部隊が渡渉するのかと思っていると人夫がカヌア（丸木舟）を上手にあやつって先頭馬をこれに結んで渡りはじめた．　あとの３頭は先頭馬を追ってこの大河を難なく渡ってしまった．　そのカヌアで２回目には荷物　３回目にはわれわれが乗って１時間もたたぬ間に渡渉作業を完了してしまったのには驚いた．川を渡ってさらに東へ進むと　やがてバナナ園が見えはじめた．　エクアドルがバナナ王国であるとは聞いていたが　ここではじめて世界一をほこるバナナ園を目前にすることができた．　バナナの大きい葉が茂って昼なお暗い感がある．　その中を自動車道路がはるかに続きどの木にも長さ１m　径 50cm に及ぶ70〜80本のバナナの房が下向きにたれ下っている．　大型トラックでバナナの積荷をしている．　トラックの運転手に事情を話して　ここからバナナトラックを利用することとし　苦楽を共にした２名の人夫と４頭の馬に別れをつげた．　あの道を再び今からもどってゆく人夫たちに同情を禁じえなかった．トラックの積荷が終ってケベード(Quevedo)の町まで出たが　トラックの走る２時間のあいだ　バナナ園以外には何も視界に入ってこない．　おどろいたも

サントドミンゴからケベードへ続く国営バナナ園の景観



バナナの積荷作業　一般に 15t を積み　グアヤキル港から輸出する

のである．　聞けば南北105kmにわたるケベードからサントドミンゴにかけての区域は政府の計画で最近5年間にこの大バナナ園が実現したよしで　その中央を貫通するバナナ輸送道路の立派なことはおどろくべきものである．　この地方で　現在バナナ価格は100本で18スークレ（360円）ということであった．　試みに木からもいで試食してみたが　たいへんおいしかった．　その日はケベード（人口3万）に1泊し　翌日バスでサントドミンゴ経由　キトーにもどった．

この旅行は私にとっては最悪の旅であった．　キトーにもどってからは緊張がとけたせいか　落馬した時に打った肩が却って痛みはじめたし　馬の背にもまれた内股の痛みもひどく　役所を休んで病院通いをはじめることになってしまった．　同僚のエクアドルの地質屋が心配して見舞ってくれたり　みやげ話を聞きに私のホテルにやってきたものだ．　エクアドルの地質調査所所員にとっても　私の歩いたコースは未開発のものであったわけである．　雨にうたれてよごれたルートマップを出しては困難だった旅の思い出をかみしめることが日課になっていた．

しかし西部アンデスの旅行は未だ終ったわけではない．これからがむしろ本番なのである．　とにかく体調の挽回をはかりながら今後の計画を考えてみた．　標本もかなり収集することができたし　ルートマップの整理もしなければならぬ段階にきているので　当分はその整理をすることにして薄片を作っては岩石の記載にかかった．その結果　東部アンデスを構成している変成岩類の大まかな性質を知ることができたし　太平洋岸の平野の基盤を構成している古第三系堆積物はOligoceneまでは主として東部アンデスの岩石からなりたっていることなどを知ることができた．

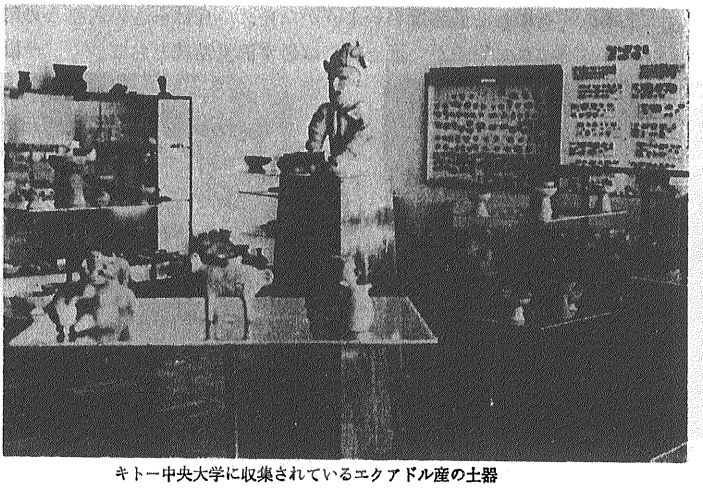
内業に専念していたこの頃　クエンカ大学から特別講義の要請があって　にわかに南部への旅をしたことはすでにのべたとおりである．　あれこれと思いもかけぬ事態が発生して　どんどん日が経ってゆく．　早く西部アンデスの横断調査を終了したいと思ってはいたが　この頃から他班がジープを使うようになっていたので　車の手配がつかず　ようやく5月3日になって西部アンデスの旅行が実現した．　コースはキトーからサントドミンゴまでの90kmの間であるが　その間には立派な道路があるので　この旅行は難儀することはなかった．　むしろ問題は連続している大露岩の前に立って思いをめぐらすことが多く　予想外に時間を費やした．　詳しいことについては“地質調査所月報　Vol. 17　No. 1”に報告しておいたが　すばらしい枕状熔岩の産状　天をつく白亜紀層の大崖　頻発する巨晶の玢岩岩脈など　魅せられるような地質現象が多く　細かいスケッチを続けざるをえなかった．

この旅行にはエレラのほか　キトー大学の地質学科の学生も参加して賑やかなエクスカーションといってよかった．　その後暇をみてはアンデス中間盆地の氷河地形と堆積物の調査に出かけたので　計画していたアンデス山脈の横断調査を一応完了したときには　すでに帰国の手続きや送別会があちこちで開かれはじめていた．

何とか外業の結果を帰国前にエクアドル政府に提出したいと考えてホテルの夜は最後の追い込みでおそくまで忙しい思いをした．　その甲斐があって太平洋岸のバイーアから首都のキトーをへて東部の町ボルハに至る東西300km余に及ぶ大アンデスの地質断面図を10万分の1に収めて製図をし　それに英西2カ国語の解説文を付してエクアドル政府に提出することができた．　その日は正に私がエクアドルを離れる前日（1965年6月18日）であった．

かえりみるに　唯1本のルートを歩き終って　考えをまとめる暇もなく　単に集積した資料を残してきたにす

バナナ園で右エレラ教授と筆者　左はしの少年は山猫をうちとって筆者に売り付けるため　行を共にした



キトー中央大学に収集されているエクアドル産の土器

ぎなかったのである．　幸い採取した岩石片と私がつくった100数10枚の薄片はルートマップと共にエクアドル地質調査所に保管されることになったので　誰もが苦労なしにこのルートの地質の状況をつかみうる状態にしておくことができた．　エクアドル地質調査所を訪ねる世界の地質学者がそれに触れることがあるならば　私としては望外のよろこびである．　私の後任として竹田英夫技官が現在エクアドル地質調査所で技術協力の任務についているが　私の果たせなかった数々のテーマが　今も日本人の手によって進行していると思えば楽しさはまた格別である．　ここに同氏のご苦労をしのび　健闘と成果を祈る次第である．

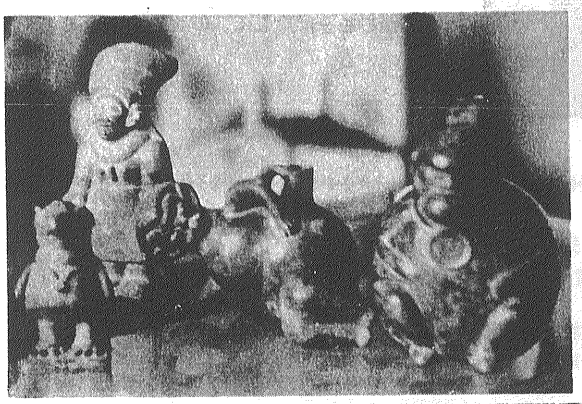
8. おわりに

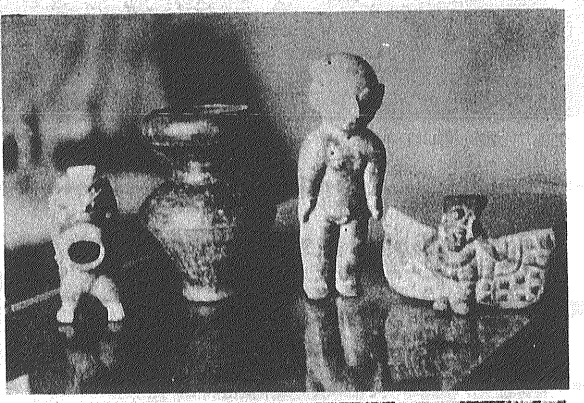
以上4回にわたってエクアドル事情を紹介したが　技術協力という1つのテーマから逸脱しないように心がけたので　別の側面からの報告はできなかった．　日本人にとっては大へん縁の少ない国のことであるから　1年間の数々の行事や風俗　習慣　宗教といったものについても紹介すべきであったと思うが　どれ1つとってみても報告はかなりの圧巻にならざるをえないと思われる．とくに2月中旬のカーニバル　12月はじめの斗牛祭　4月の復活祭などはエクアドルの大きい行事である．　そのほか年末年始のただずまい　インカの残した文化　インディオの生態など　かぞえればきりがないようである．

おわりに当って書いておきたいことは　エクアドル人の家庭の生活である．　私が家族と離れてたった1人で1年もの長い間ホテル住いをしていることに同情したこちらの地質調査所の諸友が家庭料理をつくっては招待してくれた．　そのお蔭で親しく家庭の1員の如き生活もすることができたのは大へんしあわせであった．　とくに私と同室で仕事をした地球化学専攻のオロスコ博士は真心をこめて私を助けてくれた恩人である．　彼女の家庭にはきわめて厳格な両親と5人の弟妹がいたが　食事はいつも賑やかで笑いながら楽しくとることができた．昼食がもっとも重く　朝晩は軽くパンとコーヒーですませているようであった．　食事のたびに歯をみがく習慣があり　無精者の私でさえ1日3回歯をみがく習慣が身についてしまった．　衛生思想は大へん高いといってよい．　百才をこえる老人が多いことは生活のゆたかさ心の安らぎがこの国にあることを如実に物語っている．

エクアドルはよい国であった．　善意の人々が私のまわりにいてくれた．　はるかにその人々のしあわせを祈って筆をおくことにする．

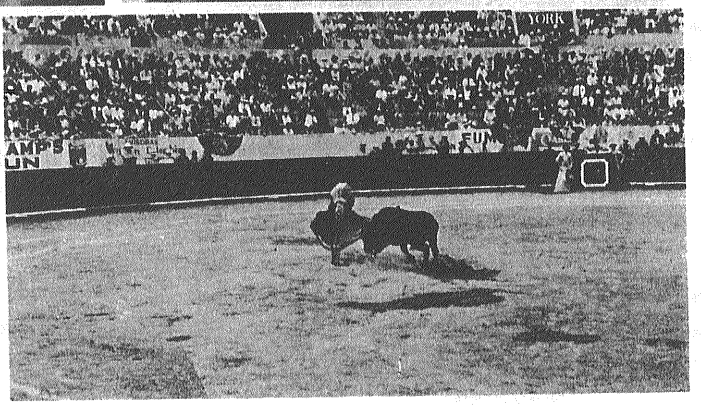
（筆者は北海道支所　鉱床課長）





インカ帝国の遺産
病人のモチーフが印象的

土器の特徴の1つは　耳たぶと鼻腔に穴があけられていることで　装飾には熱心であったことがうかがえる



キトーで開催された闘牛祭
闘牛士はスペイン人牛はメキシコ産